

CONNECT

天理大学広報誌

Vol.
05

学びが、未来を動かす。



人と関わること。地域と向き合うこと。誰かの役に立つこと。

天理大学では、社会との接点の中で学びを深める実践がひろがっています。

地域とともに歩む活動の中で生まれた、学生たちのリアルな学びをお届けします。



教育支援

中学校への部活動指導

教えることが、
自分自身を育てていく。

部活動指導の
様子はこちら



文部科学省が推進する「部活動の地域展開(地域クラブ活動)」の一環として、天理大学の学生が地域の中学校で部活動指導を行っています。本学では奈良県教育委員会・天理市と連携し、100名を超える学生が指導者として登録。研修を受けた学生が天理市内の公立中学校で指導者として活躍しています。今後は活動の幅をひろげ、県内各地の中学校へ派遣される予定です。天理市立西中学校では、バレーボール部の学生が指導を担当しています。生徒一人ひとりに寄り添いながら、前向きな声掛けや実践的な指導を行うことで、子どもたちの成長を支えています。また、学生たちにとっても、指導経験を通じて伝える力やコミュニケーション力を磨くことができる貴重な学びの機会となっています。



教えることが、自分自身の成長につながった。

地域クラブ活動に参加したのは、地域との関わりを深めることや、将来教員をめざすうえで実践的な経験を積みたいと考えたからです。最初は指導への責任や生徒との距離感に不安もありましたが、お手本を見せたり、楽しい雰囲気づくりを意識したりすることで、生徒たちも積極的に取り組んでくれるようになりました。活動を通して、相手に分かりやすく伝える難しさや大切さを実感しました。今後も相手の立場に立って考えながら、伝える力を磨いていきたいと思っています。

坂野 琥多朗さん 体育学部 体育学科 3年次生／バレーボール部



地域交流

ホースセラピーの取り組み

人と馬がつくる、やさしい時間。

馬とのふれあいを通して心と身体の健康を支援する「ホースセラピー」。天理大学では、馬術部の歴史と環境を活かし、2019年度よりホースセラピー活動に取り組んでいます。現在はホースセラピー馬「てんてん」と馬術部スタッフ、教職員が不登校支援や地域交流イベントなどを実施しています。授業では、医療・福祉・教育分野での活用事例を学ぶとともに、実際に馬と接する実習も行っています。学生たちは、人と馬との関わりを通して、相手に寄り添う姿勢やコミュニケーションの大切さを学んでいます。



母の日
イベントの
様子はこちら



北野 紗月さん
医療学部 看護学科
2年次生

馬と向き合うことで、人と向き合うことを学んだ。

動物が好きで、この授業に興味を持ちました。特に、馬を活用したセラピーについて学ぶことに魅力を感じ、馬術部にも入部しました。印象に残っているのは、ホースセラピーに参加された方と馬が自然に触れ合う姿です。人と馬との間に信頼関係が生まれていることを実感しました。また、馬の世話や触れ合いを通して、生き物と向き合う難しさや大切さを学びました。教室だけでは得られない貴重な経験だったと感じています。今後は、ホースセラピーの魅力や効果を、より多くの人に伝えていきたいと思っています。



国際交流

韓国語講座 ~TAとして参加~

言葉を学ぶことは、人とつながること。

天理市と韓国・瑞山(ソサン)市との交流をきっかけに今年4月に開講された韓国語講座(天理市主催)。市内の中学生を対象に、韓国語の基礎や異文化理解を学ぶ機会として実施されています。講師を務めるのは、天理大学国際学部 韓国・朝鮮語学科の高地朋成教授です。さらに、同学科で学ぶ学生たちもティーチング・アシスタント(TA)として参加し、授業運営をサポートしています。発音練習や会話演習を通して、中学生たちは韓国語の楽しさを体感しています。また、学生たちにとっても、大学で学んだ知識や語学力を地域へ還元できる貴重な実践の場となっています。



TAとしての
授業運営の
詳細はこちら



井谷 咲多さん
国際学部 外国語学科
韓国・朝鮮語専攻 4年次生

学んだ韓国語が、人と人をつなぐ力になる。

昨年、天理市と韓国・瑞山市の中学生交流事業に通訳ボランティアとして参加した際、「中学生が少しでも韓国語が分かれば、もっと交流を楽しめるのではないかと感じ、この活動に参加しました。教える立場になるのは初めてで不安もありましたが、自分が韓国語を学び始めた頃の気持ちを思い出しながら中学生たちと向き合いました。特に印象に残っているのは、最初は緊張していた中学生たちが、発音や会話ができるようになるにつれて自信をつけ、うれしそうな表情を見せてくれたことです。今回の活動を通して、大学で学んできた韓国語を地域のために活かすことができました。また、教える立場を経験したことで、韓国語教育にも興味を持つようになりました。学んだ知識を誰かのために活かし、人と人をつなぐ役割を担えたことは、私にとって大きな学びとなりました。

歴史は、過去を知るため

PROFILE 天野 忠幸

天理大学 人文学部 歴史文化学科 教授
専門は日本史(戦国・織豊期)。三好長慶や松永久秀をはじめとする戦国期の政治・社会史を研究。武将の書状や古文書、国内外の史料をもとに、中世から近世への社会変化を読み解いている。大東市PR大使「大東歴史の伝道師」としても活動し、史跡活用や観光振興、地域の歴史資源の発信にも携わる。NHKの歴史教養番組への協力・監修などを通じ、研究成果をひろく社会へ届けている。



地域資産を、未来へつなぐ。

「小学生の頃、時代劇を観て、現代とは異なる価値観のもとで動く人々や、その世界に感動し、強く惹かれました。それが歴史に興味を持ったきっかけです」。

そう話すのは、天理大学人文学部 歴史文化学科教授の天野忠幸先生。16世紀前半の戦国時代から、織田信長と豊臣秀吉が

政権を握った織豊期を専門とし、研究に取り組まれています。

「足利將軍家に代わって、三好長慶・織田信長・羽柴秀吉といった新たな『天下人』が生まれ、時代は内乱から天下泰平へ、中世から近世へ。そうした歴史の大きな転換期に、社会がどのように変化していったのかを研究しています。武将の手紙、公家や僧侶の日記、村に残された古文書、時には中国やポルトガル、スペインに残る史料から、それを読み解いています」。

埋もれていた地域の価値を再発見。

現在、特に研究対象としているのは、戦国武将の三好長慶や松永久秀。そう聞いて、どんな人物が分かる人は多くないはず。実際に、高校の教科書ではあまり記述がありません、と天野先生。

「ですが近年、彼らが遺した城郭跡や、彼らとの由緒を持つ寺院などの価値が見直されるようになり、国史跡や地方自治体の指定



だけにあるわけじゃない。

地域に残る歴史や文化には、
その土地で生きてきた人々の記憶や営みが刻まれています。
天理大学 人文学部 歴史文化学科 教授の天野忠幸先生は、
研究室の中だけにとどまらず、
地域や自治体と関わりながら、
その価値を未来へつなぐ活動に取り組んでいます。
今回は、歴史研究を通して「地域の魅力の再発見」に挑戦する
天野先生にお話を伺いました。

歴史を通して、地域の力に変える。

天野先生は実際に、地域・自治体と連携した活動として、「大東歴史の伝道師」という大阪府大東市のPR大使を務められました。三好長慶は、織田信長に先駆けて畿内を制し、天下人となった人物。その最後の居城となったのが、大東市と四條畷市にある飯盛城です。

「飯盛城を通して大東市の魅力を発信するため、観光パンフレットを作成し、長慶や飯盛城に関するお土産に紹介文を付け、大東市の歴史をお伝えしながら地域PRを行いました。また、長慶と飯盛城を題材とする漫画の脚本を執筆し、戦国時代や、大東市が位置する河内国の魅力を伝える活動にも携わりました。長慶を讃えるために始まった『三好長慶公武者行列in大東』も今年で10回目を迎えました。長慶が中国皇帝の使者やキリスト教宣教師に対応したことが判っているので、武者や茶人だけでなく、中国人やポルトガル人のコスプレをする方もいらっやって、「地域の方々が自分たちのまちにはこんな歴史がある」という誇りが生まれてきているように感じます」。

学生と共にひろがる学び、そして未来へ。

天理大学創立百周年記念で刊行された「新大和人物志」(なら文化財交流機構、2025年)は、コラム執筆や写真撮影を学生たちが担当しました。

「学生たちがさまざまなテーマに興味を持って卒論に取り組むことで、こちらも新しい視点をもらい、研究の幅がひろがっています。歴史を学んでいると、どうしても偉人とされる人物に目が行きますが、彼らを支持したり、生み出したりする背景や社会が必ずあります。これから歴史を学ぶ学生たちには、偉人が現れるのを受動的に待つのではなく、もっと能動的に社会に関わり、自分から新しいものを生み出していった欲しいですね」。

歴史を学ぶことは、過去を知るだけではなく、確実に現在、そして未来へつなぐ道しるべになっています。

文化財になるなど、その歴史的・文化的価値が注目されるようになりました。そうすると、地域の大切な『宝』として、地域の方々にも認識されるようになるんです。さらにそこを目掛けて、観光客も増えました。私の取り組みも、そうした地域活性化の一助となっていれば嬉しいです」。

歴史上の人物を研究することで、ゆかりのある地域や寺社仏閣の魅力を再発見することにつながり、さらに研究成果や情報を発信することが、地域を活性化するお手伝いになっているのです。

「また日本史は、漫画やドラマ、アニメ、ゲームの題材としてもよく取り上げられていますよね。さまざまな歴史研究が進められていることで、描かれ方も変わってきています。これらのコンテンツは日本が誇るソフト・パワー。日本人だけでなく海外の方にも、日本に対する認識を深めてくれるきっかけになるかも知れないと期待しています」。



学生時代は、野球に打ち込みながら、体育学部代表として大学祭での神輿製作や、体育学部の学生たちによる体育大会の開催、卒業アルバム制作など、当時なかった企画を発案・実行しながら、学生生活を自らの手で盛り上げてきた清水さん。仲間を巻き込みながら形にしていくなかで、現在の会社経営にもつながっています。



天理大学 体育学部 体育学科
1989年3月卒業
万水電機設備工業株式会社
代表取締役
清水 大吾さん

部活動と並行して体育学部代表を務め、他学科との交流やイベント企画にも積極的に取り組んだ。卒業後は空調会社で経験を積み、現在の職場に入社。

ないなら、自分たちでつくる。 場を動かす力は、天理大学で育んだ。

大阪市の北東、梅田などの中心地にもほど近く、多くの人が暮らすベッドタウンに本社を置く万水電機設備工業株式会社。全国の下水処理施設や浄水場、ごみ焼却処理施設、し尿処理施設など、人の暮らしになくてはならない環境プラント施設の機器据付、配管、電気工事の施工管理を行う会社です。こちらで代表取締役を務めるのが、1989年に天理大学体育学部を卒業した清水大吾さん。

「天理大学での学生生活は野球に打ち込み、また『ないなら、自分たちでつくる』ことに挑戦し続けた4年間でした。だからこそ楽しく、あっという間の貴重な日々でした」。

理想を実現するために挑戦し続けた4年間。

高校では野球部の強豪校に在籍していた清水さん。大学でも野球を続けたいという思いはありましたが、「高校ほど野球一色ではなく、大学生活も充実させたい」と考え、進学先としてめざしたのが天理大学でした。



「高校では野球三昧だったので、部活を引退し、志望校を天理大学と決めてからは猛勉強しました。無事に天理大学体育学部に入社し、下宿生活を送りながら野球部の部活動をスタートした1年次生の時に、大学祭や体育大会などの学校行事に、体育学部があまり参加していないことを知ったんです。学生たちが

部活動に専念するためではあったのですが、せっかくの大学生活。『これはあかんやろ』と思い立ち、自分で動くことにしました。調べてみると、大学祭では学部ごとに神輿(みこし)を製作して天理市の商店街などを練り歩き、地域も一緒になって楽しんでいることが分かりました。そこでまず、体育学部でも神輿をつくろうと動き始めました。当時休眠状態だった校友会(体育学部学科会)で会長をしていたサッカー部の4年次生に声をかけ、野球部の先輩たちにも手伝っていただくことになり、そこからさらにラグビー部、剣道部、バレー部なども来てくれて、最終的にラグビーボールの形をした神輿を皆んなでつくることができました」。

神輿製作から始まった清水さんの取り組みは、さらにさまざまな挑戦へとひろがっていきました。体育学部代表として、部活動の異なる仲間たちと協力し合い、体育学部の学生たちによる体育大会を開催し、他学科の新入生歓迎会など、学部の垣根を越えた交流にも積極的に飛び込んでいきました。

「4年次生の夏以降は、ダンスにも挑戦しました。当時から強かった天理大学の創作ダンス部に、私たち野球部、ラグビー部、バレー部、体操部、ハンドボール部などの男女10数名が加わって合同作品を作り、12月に舞台に立ったんですよ。こちらも初めての試みです。まったく経験がないことに取り組むのもおもしろかったですし、一緒にやってくれる仲間がいるというのも幸せですよ。もう何事も目一杯取り組んだ、充実した4年間でした。

なかでも印象に残っているのが、卒業アルバムの制作。天理大学では制作されていないことを知って驚き、当時の私は『4年間で過ごした思い出を残すものがないのは寂しい』と感じました。ないのであれば自分たちでつくろう、と動き出したんです。制作会社さんとのやりとりから行事の写真を学生から集めること、先生方の写真撮影まで学生主体で進め、試行錯誤の末、卒業アルバムを完成させました。今でも自宅に大切に保管しています※)。学生が何かに挑戦したいと声を上げたときに、止めることなく学生の主体性を尊重して見守ってくださった、天理大学の自由でおおらかな校風も、振り返ればありがたかったですね。いろんな仲間と交流し、今も続けていることは一生の宝です」。

※現在、卒業アルバムは制作されていません。

仲間と動く力が、会社を支える力になる。

学生生活を充実させる一方で、野球部での日々も清水さんにとって大きな学びの場となっていました。



MY ACTION!



清水さんが発案し、体育学部の学生、先生方に声をかけて実現した卒業アルバム。「ないから諦める」のではなく、「ないなら、自分たちでつくる」という行動力が実となりました。

「天理大学の野球部は、先輩・後輩の関係性は保ちながらも、“仲間”として一緒に野球を楽しもうという温かなつながりがありました。監督や先輩にも非常に仲良くしていただいて、部活以外の時間もよく一緒に過ごしましたし、勉強面では苦手な科目を教えてもらうこともありました。そんな仲間と春の阪神大学野球連盟の春季リーグで3年次生・4年次生と優勝できたのも良い思い出です。改めて野球の楽しさを感じましたし、礼儀や忍耐力と共に、チームで動くことの大切さを学べたと感じています。そこで育まれた価値観は、現在の経営の根幹にもなっています。会社も野球のチームと同じで、1人だけががんばっても成り立ちません。社内は営業部、工事事務と部署は分かれていますがお互いに理解しながら会社全体が一つのチームとして動いていくことが大事だと思っています。だからこそ、従業員の健康が第一。安心して、元気に働いてほしいですね」。

その思いは、会社づくりにも反映されています。万水電機設備工業では、ラジオ体操や有酸素運動など、毎朝20分間社員全員で体を動かし、社員同士が親睦を深めるイベントなども率先して行い、チームワークを育てています。2021年以降、従業員の健康管理を戦略的に実践する健康経営優良法人として認定されており、2024年には、従業員の働きやすさを重視した、開放的で明るい新社屋も完成。経営理念である「皆んな 幸せになろう!」のもと、ますます結束力を高めながら成長を続けています。

天理大学で積み重ねた経験が、現在の礎に。

理想の大学生活を実現するために、さまざまなチャレンジを積み重ねた清水さん。そこで培った行動力や交渉力、決断力、そしてチームワークなどのスキルは、経営者としても大いに活かされているといいます。

「万水電機設備工業が担うのは、地域の皆さんの暮らしになくてはならない、生活インフラを支える事業。眼に触れることの少ない部分ですが、地域社会で暮らす人の“当たり前”の生活を支え、貢献できているという喜びを日々感じています。その礎になっているのが、大学生活での経験から身につけた力、そして価値観です。『チーム万水』としてメンバーの健康を守りながら、これからも一緒に地域の暮らしを支える一端として戦って参ります」。

CONNECT PROJECT

社会とのつながりは、ここにもひろがっている。

地域・企業・自治体とのさまざまな連携プロジェクト。天理大学が社会とともに取り組む活動をご紹介します。



手づくり健康ほっとサロン

地域住民との交流を通して、学生は生活者の視点や思いに触れ、一人ひとりの生活や価値観を理解します。その人らしい暮らしを支えることが看護の原点であることを実践から学んでいます。



公開講座

人文・国際・体育・医療など幅広い分野の公開講座を通じて、地域に開かれた学びの場を提供。大学の知見を社会と共有し、人と地域をつなぐ取り組みを続けています。



社会福祉実習懇談会・進路相談会

実習で連携している福祉施設などを対象に実習懇談会・進路相談会を開催。学生は職員からリアルな現場の様子を学び、地域を支える福祉職への理解を深める機会となっています。



スポーツ指導者育成研修

中学校運動部活動の指導者を対象に、コーチングや安全管理、スポーツ倫理などを学ぶ研修会を開催。地域で活躍する指導者の育成を通じて、子どもたちの健全な成長を支える環境づくりに貢献しています。



交通安全啓発プロジェクト

天理警察署と協働し、自転車の交通ルールや新制度の周知を目的とした啓発活動を実施。学生自治会などがポスター制作や街頭啓発に参加し、地域の交通安全や防犯意識の向上に貢献しています。



「YUHO Rally 飛鳥」運営サポート

学生たちが「YUHO Rally 飛鳥」の大会運営スタッフとして参加。企業や地域の方々と協力しながら、受付やステージ運営などを担当し、実践を通して社会とのつながりを学びました。

※「YUHO Rally 飛鳥」は、奈良県を舞台に開催される全日本ラリー選手権公式戦で、地域・観光・モータースポーツが融合した国内有数のラリーイベントです。

ご寄付のお願い

未来の学びを
ともにつくる。

創立百周年を迎えた天理大学は、その歩みを未来へつなぐため、「創立百周年記念事業募金」を実施しています。学生の学びや研究、地域との連携をさらに発展させるため、皆様の温かいご支援をお願いいたします。

詳しくは
こちら

